

吉田氏は、そのときの依頼主の安堵と喜びの顔が忘れられなかつた。少子高齢化社会で、遺品整理に困る人はもつと増えるかもしれない。遺品整理専門の業者はまだ見当たらない。それならばと、日本初の遺品整理サービス会社を立ち上げたのは二〇〇二年のこと。さだまさし氏の小説「アン・トキノイノチ」(幻冬舎)をはじめ、それを原作とした映画やテレビドラマの主人公が働く会社のモデルとなつた「キーパーズ」の誕生である。

ご遺族の方の「ありがとう」ほど重みのある感謝の言葉はない」と吉田氏は言う。心から喜ばれた経験は自信につながり、やがてそれはどんなことでも断らないという決意になつた。遺品の整理・供養、部屋の特殊清掃、脱臭・消毒作業、車両の廃車手続き、部屋のリフォーム、解体作業、不動産売却、形見分けの引っ越し、リサイクル品の買い取り、家電の適正処理相続手続き、専門家の紹介、事前の遺品整理相談……、「キーパーズ」は今も、遺族の方々のあらゆる要望に応えるべくサービスを提供し続けてい

「うちで、すべてお引き受けできますよ。よろしければお見積もりいたしましようか」

ある日、いつものように引っ越しの見積もり依頼があり、出かけていくといくつかの品物を二ヵ所に分けて運んでほしいと頼まれた。部屋にはまだたくさんの家財道具が残っている。これからリサイクルショップを探して処分方法を考えるのだという。当時すでに全国初の「ひっこしやさんのリサイクルショップ」も開業していた吉田氏は、いつもの営業のつもりで声をかけた。

大阪の表具屋に生まれ今話題になっている大阪の桜宮高校の体育科の一期生として入学、卒業後は調理士学校で学び、日本料理の板前に。その後佐川急便勤務を経て、二十八歳のときに引っ越し運送業を始めた吉田太一氏。彼に転機が訪れたのは、運送業を始めて七年ほどたったときのことだ。

これは「孤立死」  
そのものではなく、  
最期までどんな生き方をするかです

吉田太一 氏に聞く  
遺品整理会社「キーパーズ」代表

卷之三

。2002年日本初の遺品整理専門会社「キーパーズ」  
は、富山、大阪、福岡、北海道、北九州、そして韓  
国で1500件に及ぶ遺品整理サービスを提供している。  
『孤立死 あなたは大丈夫ですか?』(共に扶桑社)  
『いじょうぶ。』(ポプラ社)『遺品整理屋は聞いた!! 天国へのお引越  
し出版社』『遺品整理屋は見た!! 天国へのお引越  
し品をお願いします。』(共に幻冬舎)、など、著書多数

い 遺品の整理は、その人の存在を記憶の中に移す作業かもしけない

が死ぬまで絶対やめないで」という励ましの反響が届くようになつたのです。



遺品の合同供養

なせそんな勝手なことができるかというと、私たちは作業着手前に全部売却してもらつてうちの所有権に変えているからなのです。ですが、遺品の処分に関して、今までクレームが出たことはありません。

：そこで、祭壇で供養をしたら遺品も天国に行くだらうと考えたのがきっかけです。

創業以来各支店内に供養専用式場を設け、ご遺族の要望に応じて処分の前に式場に安置したのち無料で合同供養を行っています。

——遺品の中から故人の人生が垣間見えると「こともありますか？」

「キーパーズ」では、今まで一万件ほどの遺品整理をさせていただきました。遺品の中には、人

方を

いはいつしか使命感になりました

—「キーパーズ」のお仕事が軌道に乗ってからも、しばらく悩まれた時期があったと伺いましたが。

遺品整理をビジネスとして行なうことは間違っていないだろうかという思いは、開業当時からありました。本来、家族や友人のような、故人を知る人間がやるべき遺品の整理を、お金をもらつて請け負つ

気持ちはあるけれど、物理的に無理な方たちがたくさんいらっしゃる、その方たちのために「キーパーズ」がある。気持ちが定まつてからは、迷いがなくなり、同時に第一号としての気概を覚えるようになりました。

あつという間に同業者が生まれるのが現代社会です。中にはいい加減な業者も出てくるかもしれないだからこそ、「キーパーズ」はちゃんとした基準値をもつた存在として居続けなければいけない。迷

気持ちはあるけれど、物理的に無

安全な状態では束縛を嫌つて一人になりたがる。人間は不安と煩わしさのバランスを取りながら生きている。だから助け合いや絆もある。本来はこのバランスの中にあるものですが、問題は、そのバランスが崩れ始めたということだと思います。どんなに不安になつても、煩わしいのが嫌だから誰かに助けを求めようとしない時代が来るのかもしれません。

例えば、「無縁社会」という言葉があります。本来、人が存在する限り、縁はなくなるものではあ

——「孤立死」はすべての人に可能  
性があるということでしょうか。

どんな人でも「気づかれないか  
た死」を迎える可能性はあります  
孤立死の問題は、それ自体の善し  
悪しを論じたり、社会現象として  
の解決を探すのではなく、孤立死  
の現場を知り、残された遺族や住  
まいの周辺住民につらい影響を残  
してしまった事実を共通認識として  
もつことから始まると思います。  
もし死の瞬間が一人だとしても、  
二十四時間以内に気づいてもらえ  
る環境をつくることは可能です。

そもそも絆は、状況が変わったときに必要なば必然的に生まれるものだと思います。例えば、寒かつたら自然に寄り添つて温まろうとするけど、適当な温度なば他人のそばには寄りたくない。不思議な感じで、

問題は、一人ひとりが「どう生きるのか」なのだと思います。「孤立死」を考えるときは絆も大切ですが、人間関係と絡めた社会現象として解決策を探つても答えは見つからないでしよう。

絆つて、はつきり言つて本当の言葉の意味をあまり深く考えずに使つていいのではないかな?と思ひます。人の結びつきとか支え合いの意味で使われるようになつたのは最近のこととて、一種の流行語の

用できない、生かせないといふことでしょう。でも、支援の「援」は受ける側と提供する側の問題で、助け合いの気持ちがなくなれば援も薄れていく。現代社会は、むしろ「無援社会」というほうが適切

息を引き取る瞬間が一人  
か一人でないかは、孤立  
死の物差しにはならない  
——遺品整理と言つてもさまざま  
現場があると伺いましたが、「孤立  
死」の方の遺品整理をされることも  
ありますか？  
私たちの仕事は残された家財道

「キーパーズ」設立のころ葬儀社に営業に行き、「首つり自殺の現場を見たことがあるのか、その臭いを嗅いだことがあるのか、どちらになつた床の掃除ができるのか」と言われたことがあります。

あるでしょう。でも遺品が整理されて部屋が空っぽになつた瞬間に、故人の存在の痕跡は消えてしまひます。遺品の整理によって、かつてそこに生きていた人間は世の中から完全に消え、記憶の中の存在に変わります。ですから遺品の整理ができなければ、本当の意味でこの世を終えることはできないのだと思います。

遺品整理とは、その人の存在を最後に消し去る作業です。ある意味でこの世のいのちの最後のとどめをさすのが私たちの仕事なのかも知れません。決していい加減な姿勢でできる仕事ではない。私たちにはご遺族の気持ち、故人の気持ちを受けて、どんな現場でも毎回



卷之三

は他の人も嫌なはずだ。みんな嫌がることをできるなら、それこそが「キーパーズ」の存在価値になると思い、思わず「やりますよ！」と答えていました。

間で発見されたことがあります。親類が連絡を取つてもつながらなかつたのですが、もともとお元気な方なので旅行に行つているだろうとみんな心配しなかつた。ところが、いつも旅行に行く仲間が異変に気づいて、訪ねていつたら死後一週間だつたというのです。

友人も多く、親族とも親しい人が、偶然一人で亡くなつてしまつた。でも“死後一週間”ばかりが強調されると、独居老人の孤立死となつてしまします。

天国から故人が見ていたら「ちよつと待て！」と言つたかもしれない。」「倒れたときがたまたま一人だつただけで、それを孤立死と

「言われたらたまたまごたもんじやない」と、怒られるかもしれません。

工夫することはいっぱいある

会はこの絆が薄れたということを感じ、

はなく、職人を育てるための訓練学校が必要だと痛感、大阪府に直談判して職業訓練校をつくり、その学校の初代校長を務められた。

「これからも、いつも、誰もやつたことがないことを考え続けていたい」

「人生」  
具体的  
うぶ  
の方に、  
待ちで  
の上、  
――――――――  
T-2-4-  
(差し  
ご希  
お問  
お父さま譲りかもしない。  
れた理論で組み立て、一つ一つ実現  
していく吉田太一氏エネルギーは、

「キーパーズ」では「有意義なよりよい  
を送るためのエンディングプランを具  
に考える「おひとりさまでもだいじよ  
ノート。」を発行しています。ご希望の  
お一人二冊まで送料「キーパーズ」持  
無料プレゼント。  
ご希望の方は以下の必要事項をご記入  
メールフォームもしくは、ハガキにて  
〒143-0011 東京都大田区大森本町  
22 キーパーズまでお申込みください。  
・郵便番号・ご住所・お名前・ご年齢  
支えない方で結構です)・お電話番号・  
望冊数(1・2冊)※お電話・FAXでの  
い合わせはご遠慮願います。



# 「アントキノイノチ」から思う

中村恵里香

## 「孤独死」って何だろ？

あるとき、「あなたの周りに孤独死をされた方がいらっしゃいますか」と尋ねられたことがあります。私は、「瞬間何を言つているのだろうか」という思いにとらわれました。私には、「孤独死」という言葉に大きな違和感があったからです。

### 生きること、死ぬこと

数年前上映された「アントキノイノチ」は、さだまさし原作の小説『アントキノイノチ』を映画化したものですが、この作品は遺品整理業という現実にある会社をモデルしています。映画の中で出

会った二十代前半の若者「一人が、『アントキノイノチ』と今の自分の「生命」について問い合わせる作品です。

この映画の中では、さまざまなもの、映画で描かれていても小説に描かれていないものもありますが、死と生命に対する若者の疑問が全面にぶつかり合っています。この映画作品の中で、主人公の永島杏平が言う象徴的な言葉に「人間は死ぬときは一人だ。死は一人で迎えるしかないのだけれど、

生きるのは誰かとつながっていたい」というものがあります。この言葉に行きつくまでの主人公の苦悩は若さゆえのものではなく、だからこそ、生きていれば誰でもぶつかる可能性のある言葉だと、深い感銘を受けました。

遺品整理業という本来なら身内の人間がやらねばならない仕事を代行して引き受けてくれる会社があると、『アントキノイノチ』をおじして知った人は多いのではないかでしようか。映画の中でも小説の中でもこの会社の仕事は非常にリアルに描かれていました。実は、私がこの仕事を知ったの

た私は家で留守番をしていたのですが、夜遅く帰ってきた主人が「Yさんが今日、来なかつた」と言います。

どうも嫌な予感がします。翌日、同じ思いだったのでしよう、主人はYさんの家に出かけていきました。家には鍵がかかるて留守のようだけれど、新聞が溜まつて、部屋の中はどうも電気がついているような気がする、ということで主人は大家さんの家に向きました。しかし、大家さんによると無断では部屋に立ち入れないので、明日まで待つて帰つて来なければ警察に連絡するから、明日また来てほしいと言われ、その日主人はそのまま戻りました。

翌日、再度アパートに行った彼は、Yさんの死を知らされます。不審死ではないとのことで、すぐに葬儀という運びになりました。その間のごたごたは省きますが、月内にはアパートを引き渡さなければならぬといふことで、アパートの整理に私たちも立ち会うことになりました。一人暮らしのYさんの部屋は、すごくきれいに整理されていまし

た。もちろん初めて入るわけではありません。浅草近辺で飲んだとき、電車で帰れなくなつた私たちを快く泊めてくれるような優しいおじさんでしたので、普段使うもの、大切に取つておくものがきちんと整理され、彼の人柄を感じさせる部屋でした。しかし、遺品として供養しようという気持ちもなく、金目のものをあさつて、後は勝手に捨ててくださいとおつしやしたときは、何とも心侘しい気持ちになりました。

最終的には、日記や写真など故人の思い出の品は遺族に引き取つていただきすることになりましたが、これをきちんと整理してくださる方が、業者としているのならどんなにいいかと思った最初の出来事でした。

友人も多かつたYさんの部屋は、とても男性の一人暮らしとは思えないほどきれいな部屋でした。ただ、不運にもある寒い夜、心臓発作を起こし、死を迎えたのです。

### 「孤独」ではなく「独立」？

Yさんの死も世間では孤独死とされます。孤独死とは何なのでしょうか。小説『アントキノイノチ』の中で佐相が主人公永島に「孤独、孤独死」といってしまつていて言つた。孤独死も「孤立死」も、どちらの言葉もなんだ無関心な他人の眼差しで、なんの救いもねえら。孤独って言葉の響きが冷たすぎねえかい？」という台詞がありますが、これを読んだとき、初めて私の中の「孤独死」に対する違和感がどこにあつたかわかったような気がしました。

話は少し変わりますが、バブルのころ、三十代独身という「負け組」といわれていました。それが最近では四十代独身が「おひとりさま」といわれ、もてはやされています。でも、その人たちもいたかは死を迎えます。

映画『アントキノイノチ』の中では、「絶対といえるのは死を迎えることだけ」という台詞がありますが、死の瞬間を誰にも看取られることなく迎えることを孤独死といふならば、今もではやされている「おひとりさま」もいつの日か孤独死を迎えることになります。

しかし、あえて覚悟をもつて一人で暮らし、一人の生活を見つめつつ死を迎えるようとしている人も「孤独死」といつてしまつていいのでしょうか。「孤独死」も「孤立死」も、どちらの言葉もなんだ寂しい気がします。この二つの言葉を並べてみてわかつたことは、両方とも、死ぬ際際に誰にも看取られず遺体で発見される、ということを問題にしている点です。

そこに個人の尊厳が見当たらぬのです。繰り返しになりますが、人間は必ず死を迎えます。遺体で発見されることは不幸なことかもしれません。でも人間の生き方はさまざまです。たくさんの家族に囲まれて喜怒哀楽を楽しみつつ人生を送りたい人もいます。逆に共に暮らす人を求めるのではなく、一人の時間を使楽しみ、思うままに自立し、個性を尊重し、自分自身を全うしたい人もいます。共に生活する人がいるかないかだけで、「孤」がつくつかないになってしまつて、いいのでしょうか。

一人の人生を全うする、ということは、相当な覚悟が必要です。その覚悟をもつて、人生の最後を

は、映画が上映される少し前のテレビのドキュメンタリー番組でした。そのときの衝撃はすごく大きなものでした。それは、私たち夫婦がある作家の死と直面した経験をもつていたからです。

### ある老作家の死

私たち夫婦は年に数回行われる勉強会に参加しています。この会に、よほどのことがないかぎり参加されているカストリ雑誌の研究家の作家のYさんがいます。両国人形作家の現場を見に行くことになったとき、その日にかぎつて風邪を引いて寝込んでしまつ

一人で過ごしている人が「孤立死」や「孤独死」といわれる死に方をするのではなく、尊厳をもつた「独立死」という考え方はできないものだろうかというのが、私の思いついた一つの結論です。

## 覚悟のシグナル

教会という場が、「孤独死」や「孤立死」予防の役割を果たすことができるのではないかと、最近思うことがあります。

私が子どものころの教会では、ミサの後、神父さんは教会の出入り口において皆さんと挨拶する際に、いつも来ていらっしゃるお年寄りが来ていないと、婦人会や壮年会の方に「このごろ○○さんがいらつしやらないが……」と聞いていた光景が当たり前のように見られました。すると、すぐにどなたかが「行ってみましょう」とおっしゃっていました。それは、中学生会や高校生会でも当たり前のように話題になっていました。

神父さまも今ほどお忙しくなかつたのでしょう、私の家のように子どもだけが教会に来て、親が来

ていない家庭には、年に何回は家庭訪問のように訪ねていらっしゃいました。今の教会では、小教区の活動だけではなく、教区の活動も活動だけではなく、教区の活動もあります。それぞれが忙しくなっていることもあるので、それを聞かれなくなつてしまふことがあります。

教会は宿り木のようなものだとおっしゃった方がいらっしゃいます。カトリックを信仰するということは、神のおられる宿り木に集まってきた人々が互いに尊重し、

一人ひとりがその枝の一本一本、いえ、葉の一枚一枚に目を配り、優しいまなざしを向けるべきではないかと考えています。

教会をもつてその木に集まってきた人々が、もつとお互いを見つめ合

い、気にし合うことができれば、もしかしたら「孤独死」や「孤立死」を減らす小さな手伝いになるかもしれないと思うのです。

私はすてきなお婆さんになりました。

よ。いろんな、それこそ沢山の苦労をして生きたっていうだけで、老人は尊い、と思わない?

私がずっと多いんだ

てないと老人になれないと、老人になれないんだよ。なりたくて、なれない人の

トに凄いと思う。だつてね、ずっと生き

けで、凄い、と思う。

私は、老人つてホントに凄いと思う。だつてね、ずっと生き

生命つて凄いね。生きているだけ、凄い、と思う。

命つて凄いね。生きているだけ、凄い、と思う。

生命について話をする場面があります。その中で、雪子は言っています。



原作者: さだまさし 監督:  
瀬々敬久 脚本: 田中幸子  
出演者: 岡田将生、榮倉奈々  
他 収録時間: 131分  
販売元: ポニーキャニオン

『アントキノイノチ』本  
(幻冬舎文庫)

私は、この言葉にすべてが凝縮されているように思います。今、弱者に対する目線が失われつつあるような社会の中で、社会の弱者に対してもっと優しい眼差しを向けていくことが必要なのではないでしょうか。といつても、私個人でできることは限りなく少なく、不可能が多いのかもしれません。一人では

覚悟をもって一人で暮らしている人だからこそ、「孤独死」と呼ばれないために発信しているシグナルに気づくべきではないでしょうか。